

豊田八十代の万葉地理研究

井ノ口 史

一、豊田八十代の足跡

豊田八十代は、西暦1868年4月、元号が明治と変わる直前に、兵庫県姫路市に生まれた。兵庫県尋常師範学校を卒業した後、姫路尋常中学校・大阪府清水谷女学校・東京府青山師範学校などの教諭を歴任する。そして、東京外国語学校別科（ドイツ語）での修学・卒業を経て、明治末年に奈良女子高等師範学校に講師として赴任した。

豊田は、『実験綴方新教授法』（明治45年）、『新撰書簡文』（大正2年）、『国語教授法概説』（大正5年）など、教授法に関する啓蒙書を多く執筆する一方、奈良の歴史・風土に触発され『奈良の年中行事』（大正8年）を著すなど、郷土研究にも着手した。以下に掲げるように、豊田の著作は多様であるが、中でも、昭和6年に著された『万葉植物考』、及び昭和7年の『万葉地理考』は、豊田の代表的著作であるといつてよい。

▽著作（*印は実際に確認できたもの。◇◆は関連事項）

- 1 高等小学作文大全（共著）明治24・11 発行地：姫路
- 2 作文書 明治25・5 発行地：姫路
- 3 比例法 明治25・6 発行地：姫路
- 4 算術書 明治25・8 発行地：姫路
- 5 高等小学算術書百分算開方求積法ノ部 明治27・3 発行地：姫路
- 6 高等小学外国地理 明治27・4 発行地：姫路
- 7 日本歴史 明治27・4 発行地：姫路
- 8 高等小学理科書 明治27・4 発行地：姫路
- 9 書簡文例（共著） 明治27・6 発行地：姫路
- 10 国語教授指南 学海指針社 明治38・1
- 11 国語教授法（共著） 学海指針社 明治39・2
- 12 国定新読本の研究 学海指針社 明治43～44
- ◇明治43（1910）年、井上通泰、万葉集の講義開始（昭和2年4月終了）
- 13 小学辞典 広文堂 明治45・2
- 14 国定読本新語集成（共著） 学海指針社 明治45・3
- 15 読方教授の研究 広文堂 明治45・3
- 16 国語要覧 学海指針社 明治45・3
- 17 *実験綴方新教授法（共著） 広文堂 明治45・3
- 18 *新撰書簡文 広文堂書店 大正2（「奈良高等師範学校講師」、南都東大寺畔）
- ◆大正4（1915）年『心の花』に万葉地図を掲載する（3・6月号）
- ◇大正4年～井上通泰『万葉集新考』（昭和2年まで。参照文献中に『万葉集新釈』は含まれず。）

- 19* 国語教授法概説 育英書院 大正 5
 20* 万葉集新釈 広文堂書店 大正 5。解題に木村正辞『万葉集美夫君志』近藤芳樹『万葉集註疏』への言及あり。（*大正14・6 改版）（「奈良女子高等師範学校教授」寧楽吉城河畔）

◇大正 5 年～森口奈良吉、奈良女高師教諭になる（大正10年 3 月まで）

◇大正 5 年～折口信夫『口訳万葉集』（大正 6 年まで）

- 21 土佐日記新釈 広文堂書店 大正 6
 22* 謡曲新釈 広文堂書店 大正 7
 23* 奈良の年中行事 奈良明新社 大正 8（「奈良女子高等師範学校教授」吉城河畔）
 24* 口語體女子書簡文 鍾美堂書店 大正 9・2
 25 徒然草新釈 広文堂書店 大正 9
 26* 万葉学論纂（共著）明治書院 昭和 6
 27* 万葉植物考 古今書院 昭和 6（東京青山）
 28 国文学に現れたる仏教思想の研究 大岡山書店 昭和 7
 29* 万葉地理考 大岡山書店 昭和 7

◆昭和 7（1932）年10月万葉植物園開園

- 30 万葉集の基礎的研究 昭和 9
 31* 万葉集二十六考 大岡山書店 昭和10
 32* 万葉集総釈（卷二十担当）楽浪書院 昭和10・9
 33 万葉集東歌の研究 発行所：育英書院 発売所：目黒書店、昭和11
 34* 万葉集通釈 上下巻 発行所：育英書院 発売所：目黒書店 昭和13～14（東京市赤坂区青山北町六丁目四七番地）
 35 唐詩選新解 同盟出版社 昭和15・1

▽『万葉植物考』

昭和 4 年 7 月15日「大阪朝日新聞」の朝刊には「万葉植物園創設」の見出しが掲載された。記事の内容は以下の通りである。

奈良市官幣大社春日神社では…（中略）…奈良にもつともふさはしい万葉植物園を創設することに決定したので

百濟奈良知事、大國奈良市長、江見春日宮司、木本奈良実業協会会頭、黒板、佐々木、宮地三文学博士、正木美術学校長、荻野宗教局囑託、上野本社専務取締役等

発起人となり福原男、杉岡書頭、上田、井上、山田、三上、新井各博士、春日、高木、安藤各大学教授、槇山奈良女高師校長等の賛助を得て同期成会を組織、総裁に近衛文麿公を推し造営設計の出来次第着工、万葉植物百数十種を植え込むことゝなつた

三年後の昭和 7 年10月、万葉植物園は完成した。新聞の記事には名が挙げられていないが、豊田八十代もまた、この植物園の開園にあたって貢献したことが著書『万葉植物考』（昭和 6 年）に寄せられた佐佐木信綱の序によって明らかである。それによると植物園の顧問にとの依頼も快諾し、のみならず『万葉植物考』による収入のすべてを植物園のために寄贈することに決めていたという。

豊田大人に始めて面晤したのは、その奈良の女子高等師範学校に教職を勤めて居られた時の事であつた。新村博士の紹介で、上京の折にわが竹柏園を来訪せられたが、初対面なるにも拘はらず、百年の知己の如く語りかはしたことであつた。しかして自分が年来希望してをつた万葉の地図の

製作をおたのみしたところ、万葉学に志の篤い大人は快諾せられて、やがて作成せられたので、心の花誌上に掲げ、その後更にお願ひして三回までも改訂を試みられたことであつた。

近く、奈良春日神社の神域に万葉植物園が設けられることとなり、同会から大人にその顧問を囑したところ、こもまた快諾せられたのみならず、今この万葉植物考を著されたのは、万葉学の為にひたすら努力を惜しまれない大人の熱誠のいたすところで、まことに欣賀に堪へない。殊に、かゝることはここに記すのもいかがと思はれるが、大人はこの著に対する著者としての収入を悉く万葉植物園のために寄贈せられるよしで、実にこの著述は二重に学界に寄与を為すものというてよいと思ふ。(『万葉植物考』。昭和3年10月、佐佐木信綱執筆の序より)

本書は『万葉集古義』にならい、植物を草木竹の三類に分け五十音順に並べるといふ体裁をとっている。一部の植物には代田恒夫の手になる挿絵が付されており、植物名を詠み込んだ万葉歌とともに味わえる工夫がなされている。

▽『万葉集新釈』

『万葉集新釈』は、万葉集歌の口語訳と、語句や地名などに関する簡単な解説とからなる著作である。大正7年3月刊行の豊田の著書『謡曲新釈』の末尾に付された書籍広告の文言によると

…(前略)…所論の正確創見の豊富解釈の平易巧妙実に古今に絶し嶄然として遠く類書を超絶せるもの万葉集の真価は本書を得て始て顕著なり 斯道に於ける空前絶後の名著と云ふも敢て過言に非るべし。

とある。購買欲を煽る誇大な賛辞である点を差し引かなければなるまいが、そこには、「宮内省御買上の栄を賜はる」ともあるので、少なくとも当時としては評価の高かったことが見て取れる。さらに、中華人民共和国において、1984年に刊行された楊烈氏訳『万葉集』が、佐佐木信綱の『新訓万葉集』とともに、豊田の『万葉集新釈』を参照したということが、鄧慶真氏によって報告された(2005年8月20～21日「国際シンポジウム 古代日本の言語文化」於奈良女子大学)のは、非常に興味深い。

近代に入って以降の注釈書の内、豊田の『新釈』に先行するのは、近藤芳樹『万葉集註疏』、木村正辞『万葉集美夫君志』くらいである中、年表・地図・写真(平城京址・春日山・大和三山など)を付すのも従来にならぬ着眼であった。加えて、仁徳・允恭・雄略・推古の諸朝を省き、舒明天元をもつて万葉集年表を始めているのも、現在の研究者が万葉集の時代の幕開きを舒明代(西暦629年即位)に設定する態度と通底しているのではなからうか。さらに、抄出とはいえ、巻一・二については全歌を取り上げており、単なる秀歌抄とは一線を画すものであったことは疑いない。

ところが、注釈書である『万葉集新釈』及び『万葉集通釈』(上巻：昭和13年、下巻：昭和14年、育英書店)を所蔵する図書館は、全国的に見ても決して多くない。両書とも万葉集の全歌にわたる注釈ではなく、また、鑑賞に重きをおいたわけでもないため、その後数多く出版された注釈書の類に埋もれてしまったのであろう。

しかし、『新釈』には歌の解釈上の創見もある。以下に具体例を挙げようと思う。

卷十三の三二五三歌は、柿本人麻呂歌集から万葉集に採録された長歌である。伊藤博氏は『万葉集釈注 七』(集英社、平成9年)のなかで、この作が遣唐使を送る歌であることを前提に、山上憶良が天平5(733)年に作った好去好来歌(巻5・八九四～六)への影響について論じ、三二五三歌の制作を大宝元(701)年の遣唐使派遣に際するものであると結論付けている。具体的な歌の制作年代や場が判明するという事は、作者未詳の卷十三を論じる上で非常に重要であり、伊藤氏の発言は注目すべきものである。しかし、豊田八十代はすでに大正末年の『万葉集新釈』において「これは遣唐

使を送る歌なるべし」と明言していたのである。

江戸期の注釈書、例えば賀茂真淵『万葉考』ではこの三二五三歌を「老人をことぶくならん」といい、また鹿持雅澄『万葉集古義』では「相思ふ人の平安^{サキカラ}むことをおもひてよめるなるべし」と考えられていた。『万葉代匠記』（精撰本）には、「旅ナル夫ヲ妻ノ神ニ祈テ斎ヒテヨメルナリ」との記述が見え、さらに折口信夫『口訳万葉集』（大正5年、文会堂）に至って「此歌は、思ふ人の海路の無事を祈つたのであらう」としたが、この時点ではまだ旅一般が想定されていたらしい。豊田の『新釈』の後、昭和6年の沢瀉久孝『万葉集新釈』（星野書店）では「この作は遣唐使か何か遠くへ旅立つ人に送^{マツ}つた歌である」とあるが、豊田の名は記されず、鴻巣盛広『万葉集全釈』（昭和8年、広文堂書店）の記述にも、

荒磯浪・百重波・千重浪などを用いたのは海路の旅に上る人に餞した作らしく、内容に国民的自覚があらはれてゐる点は人麿の歌なることを思はしめるものがある。

とあるのみで、遣唐使を送る歌であるとする説自体言及されず、昭和9年の松岡静雄『万葉集論究』（章華社）では単に無事を祈る歌として理解されるなど、顧みられることがなかった。太平洋戦争後、昭和27年に出版された佐佐木信綱の『評釈万葉集』（六興出版社）に至って「その国民的自覚のあらはれたところ、荒磯浪・百重波・千重浪と重ねたところなど、遣唐使の壮行歌とする豊田八十代氏の説が、げにと諾はれる」と豊田の名を挙げ再び注目するところとなった。著者である佐佐木が、かつて豊田と直接の親交を結んでいたことが、理由の一つに挙げられるであろうが、その後、沢瀉久孝の『万葉集注釈』（昭和39年、中央公論社）にも、『評釈』をふまえた記述が見られ、再び豊田の名を挙げている。

万葉集を注釈するための努力は遠く中世の仙覚以来重ねられてきたものである。現在参照されることが少ないとはいえ、豊田の『新釈』や『万葉集通釈』もまた、現在の研究を支える膨大な積み石の一つとして、再評価するべきではないかと思われる。豊田が『万葉地理考』や『万葉植物考』を著したのも、万葉集の歌の理解を深めるための一手段としてであったことを忘れてはならない。

二、豊田八十代と地理研究

①『万葉地理考』執筆の動機

『万葉植物考』の序に見たように、豊田は、奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学）在職中の大正四年頃、当時『心の花』を主宰していた佐佐木信綱に会い、そのすすめにより『万葉地図』を作成、『心の花』大正4年3月号（19—3）に掲載した。その後六月号に早くも改訂された地図が掲載され、やがて昭和7年に発行される『万葉地理考』へと結実することになる。

その序に豊田は以下のように記す。

万葉集を闡明するには、書史的研究も必要であり、文学的研究も必要であり、語学的の研究も必要であるが、地理的に考察して客観的基礎を作ることにも亦極めて重要なことである。然るに、自分は久しく奈良女子高等師範学校に奉職して、多くの万葉歌人が実景実感を歌った奈良の風光に親しみ、この種の研究をなすに極めて便宜な地位に在った。そこで、普く畿内地方の山川を跋涉して、実地の考証を重ね、更に紀伊・伊勢・近江・筑前・肥前・石見・越中等の地を歴訪して、歌人の遺跡を搜つたのである。

その頃（大正五年）、佐々木信綱博士の依頼があつたので、万葉地図を作製し、心の花誌上に掲げたのであるが、今から考へると、不完全極まるもので、慚愧に堪へないのである。

それで、当初の図に大修正を加へて、幾らか地図らしいものにしたと思つてゐるが、地図を

作るには先づ地名の研究からしてかからねばならないので、万葉地理考の編纂に着手した。

②『地理考』の特色

豊田の『地理考』は、江戸時代後期の国学者、鹿持雅澄の『万葉集古義 名所考』に倣い、五十音の順に地名を列挙する。しかし、『地理考』刊行当時の行政区分に改められているのみならず、発掘の成果や新たに刊行された地誌の類も引用し、複数の説を併記するといったスタイルを採用した。多くの地名を辞書的に検索できる上に、その地名に関連する万葉集の歌や、その国歌大観番号が列挙されており、地名と歌との関連を一目で確認できる点で有益なものであった。例を幾つか掲げよう。

例えば「きよみ」（浄御原宮）の項目では、

大和国高市郡に在り。今の上居村^{ジヤウゴ}の地なり。上居は浄御^{キヨミ}を改作せるものなり。

とする、十八世紀前半の『大和志』の記述を引用する一方、

今、宮址を踏査するに、人家所在地は、地勢險悪、且つ狭隘にして、宮殿を築くの地にあらず。

但し西南方大字祝戸に亙りて、稍々開けたり。中に字ミヤコと称する地あり。蓋し宮地の一部ならむか。とする大正4年刊行の『高市郡志料』からも引用するなど、当時としては最新の情報を織り込もうと努めていたことが知られる。また、「まがみのはら」（真神之原）の項目では、

大和国高市郡に在り。飛鳥の法興寺の地にして、鳥形^{トリカサ}山の下なり。崇峻紀に、

始作^{トマ}法興寺。此地名^{トマ}飛鳥真神原。亦名^{トマ}飛鳥苦田。

とみえたり。一九九の歌の意を案ずるに、天武天皇の陵はこの地に在りしものゝ如し。然るに、同天皇の陵は檜前に在りて大内陵と称すること、日本紀延喜式等に見えれば、この歌と合はず。考証の余地あるべし。

といったように、文献学的な考証を重んじ、性急な結論を避けるという慎重さをも併せ持つ。

また、「たかまと」（高円）の項には、

大和国添上郡に在り。春日山の南にならべり。（海拔四三二・二米突）

高円の離宮は、聖武天皇の行幸ありしところにして、倭路記には、「古市の上の岡に在り」とせり。続紀和銅元年九月の條に、「帝至^{トマ}春日離宮」とあるも、同処なるべく、志貴親王の宮も、このあたりに在りしものと思はる。二三〇の歌に、同親王の葬送の光景を叙したる句あり。当時の葬列は、今の鹿野苑の東より八伏峠を過ぎ、東金坊^{トコシノボ}なる御陵地に向ひしものなるべし。一八六六の歌に、春雉鳴くとありて、今もこのあたりに、雉の声を聞くこと多く、二二三三の歌に、秋の香のよさとありて、今もこのあたりへ茸狩に行くものゝ多きもおもしろし。

と述べ、

二三〇 梓弓云々立向ふ高円山にもゆる火をいかにと問へば云々

一八六六^{キギシ}春雉鳴く高円のべに桜花散り流ふる見る人もがも

二二三三高松のこの峯もせに笠たちてみちさかりなる秋の香のよさ

の三首を始め、「高円」という地名が出てくる歌を列挙している。巻二の二三〇歌は二十九句に及ぶ長歌で、すべて掲げるのはあまりに煩雑だと判断したのであろう、云々の語でかなり省略されているが、地名を主に歌を味わうという立場からは、非難するにあたらぬ。それどころか、雉の声が聞こえることや、地元の人々の茸狩りに行くことにまで言及するなど、季節感と臨場感に溢れる記述は読む者の旅情を呼び起こす効果さえある。

さらに、「あこねのうら」（阿胡根浦）では、

玉勝間巻九に「紀伊国日高郡塩屋浦の南に野島の里といふありて、そこの海辺を阿胡祢浦といひ

貝多くより来る処なりと。」といへり。予の实地踏査するところに拠れば、この海岸には美しき玉石多し。卷一に珠とよめるはこの玉石なるべし。

一 吾が欲りし野島は見せつ底ふかき阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ

とある。本居宣長の著書『玉勝間』の記述に触発され、豊田は自ら「实地踏査」したというのであった。これは「実地の考証」を重要視した豊田の姿勢の現れであろう。豊田は「心の花」19—3号（大正4年3月）に以下のように記す（「万葉集地図について」）。

仙覚が始めて万葉集に註釈を施してより、世々の学者力をこの集の研究につくすもの多く、考証至らざるなきは、誠に喜ぶべしといへども、ひとり地理的研究に至りては、尚靴を隔て、痒きを搔くの憾なしとせず。この点に於てよく古人の欠漏を補ひ、後学のため大なる光明を与へしものは吉田東伍氏の大日本地名辞書なるべし。然れども、吉田氏の著は専ら万葉の地理を考証せるものにあらざれば、万葉集の地理考としては、もとより遺漏少からざる上に、その説くところも实地に合はざるものあり。…（中略）…吉田氏の如き地理学者にしてこの類の誤あり。他の人々の説に誤おほきは当然なれども、中には余りに实地と懸隔せるもの少からず。…（中略）…然れどもこれ等の誤の起れるは、万葉の研究者がいつれも奈良以外の地に在りて、实地踏査の便を得ざるが為にして、誠に已むを得ざるに出づるものなれば、万葉につき十分に地理的研究を遂げ精確なる材料を提供するは実に奈良に在るものゝ責任なるを感ずるなり。

予は浅学不才、万葉につき何等深遠なる研究をなしたるものにあらざれども、幸に職を奈良に奉ずるが故に实地研究には非常に便利なる地位に在り。殊に日々通勤せる女子高等師範学校の地は古の長屋王の佐保殿に隣するが故に、万葉の編者たる大伴家持の佐保の家といふも恐らくは本校の敷地内に在るべく思はるれば一入の興味あり。且つ余は旅行の癖あり、暇あれば筈を郊外に曳くを常とせるが為、柿本寺に遊びては人麿の古を懐ひ、香具山に攀ちては藤原宮の盛時をしのび、或は山並のよろしき国と歌はれし恭仁の宮址を見て、布当の川の流域の変遷の甚しきに驚き、或はたぎつ河内と詠ぜられし瀧の宮居を訪ひて、菜摘の川の千鳥の音に帰るを忘れ、万葉の古跡を探るごとに、若しこれが正確なる考証をなさむには斯道を研究せらるゝ人々の参考ともならむかと思ふこと数々なりき。

然るに昨年の夏に及び、上京の序佐々木信綱先生を西片町の御寓居に訪ひ、談偶々万葉の事に及びしに先生は頻に地図製作のことを懇懇せらる。これにより不敏を顧みず閑を偷みて製図に着手し、先づ農商務省発行の四十万分の一の図によりて位置を定め、万葉古義の名所考その他の書を参考し、大和附近に關係ある地名を摘出して、これを記入し、更に陸軍省の五万分の一の図に拠りて、足らざるを補ひたる上、同僚にして大和誌に精通の聞え高き水木要太郎氏の校閲を乞ひ、佐々木先生に贈ることゝせり。図中載するところは多くは予が实地踏査を経たるものなれども、尚遺漏誤謬なきを保せず。叱正の労を惜まるゝ事なくは幸なり。尚地名に関する精細なる考証に至りては他日を期して高教を乞はむとす。

辰巳利文が自らの主宰する『奈良文化』6号誌上に

いままでは、昔の人の書いた書物を土台として、万葉集の地理を考へてゐたのであつたが、このころは、さうした地誌などのひどいあやまりかたが、ろこつにめだつてきたので、ほんたうに研究をしようと思ふひとびとは、すべて親しくその古蹟を踏んで、調査をせねばならないと考へるやうになつた。これは従来全く未開地の感のあつた吾万葉地理研究上に、新しいいめざめを起したよろこばしい現象の一つといはねばならない。（「万葉集の地理研究の必要」）

との考えを発表したのが大正14年5月のことであることを考え合わせると、女高師在職中（明治45～

大正9年)に畿内地方を始め万葉の古跡を跋涉したという豊田の着眼は鋭いものであったといえよう。すでに辰巳は大正11年10月『心の花』26—10号に「古典にあらはれたる大和の地名について」という題のもと、主に万葉集に見える地名を、大正11年当時の行政区分(「奈良市及びその近郊」、「生駒郡」「山辺郡」など)に従って掲げ、それが現在のどの地域に相当するのかを一覧できるようにしていた。さらに辰巳は、昭和2年11月紅玉堂書店から『大和万葉地理研究』を上梓するが、これは吉野宮瀧や奈良思岡ならしのおかなど限られた少数の土地に関する既発表の論考をまとめたものであった。対して豊田の『地理考』には鉄道の路線や等高線も書き込まれた詳細な万葉地図・十一葉(奈良・飛鳥・吉野・恭仁・住吉・和歌山・近畿・越中・石見・太宰府・九州北部)が付録となっており、歌に詠まれた土地の位置関係を一目で把握できるようになっている。これははまだ奈良の地を訪れたことのない人々の理解を深めるのに大いに役立ったことであろう。

なお、豊田の女高師在職時代、同僚に森口奈良吉がいた。森口は女高師の生徒有志と室生寺・法隆寺・飛鳥地方などへ旅行することもあったらしい(霞田真澄氏著『丹生川上神社と森口奈良吉翁』丹生川上神社発行、昭和50年)。

森口は大正10年3月に女高師教諭の職を辞し、春日大社の祓宜となった後、昭和3年、吉野離宮が宮瀧ではなく丹生川上にあるとの説を発表した。吉野離宮の位置についてはすでに大正12年『奈良文化』3号で当時京都大学助教授であった沢瀧久孝が宮瀧説を唱えこれが有力であったが、豊田は森口の見解を支持している。或いは、女高師在職中に、森口と共に吉野を訪れることがあり、清冽な川の流れのほとりにたたずんで、離宮をめぐる彼の想像を直接耳にすることがあったのかもしれない。実際、『地理考』の吉野離宮関連の項目、例えば「いめのわだ」(夢乃和太)には、

大和国吉野郡丹生川上神社の東丹生の瀧に近く碧潭あり。これなるべきかと森口奈良吉氏はいへり。

とあり、二人が深い河の淀みを眼前にして語り合っているかのような口吻が感じられるし、また、「きさ」(象)の箇所では、

大和国吉野郡にあり。森口奈良吉氏は、丹生川上中社の前を流るゝ溪流を象の小川に当て、象の小川に架したる蟻通橋の東北に聳ゆるを象山とせり。このあたり、山水秀麗にして幽邃を極め、仙境に遊ぶの想あり。

とあるように、「これが大伴旅人の憧憬した象の小川、あれが赤人の歌った象山」などと、指さしながら語る森口の面影とともに、曾遊の地を鮮やかに想起する筆者の姿が思い浮かぶようである。なお、辰巳利文は『奈良文化』17号(昭和4年11月)の編集後記で、吉野離宮一川上説を支持する豊田の名を挙げて

この説、あたかも敵傍山を飛鳥に求め、天香具山を奈良に求むるの愚なるが如く、笑止千万なり。眼光あるものゝ言ふべき辞にあらざるべし

と酷評している。

森口の説は、「羽易の山」の項目にも取り上げられている。以下に示す通りである。

大和国添上郡に在り。称名院公條の吉野詣記(群書類従卷三百卅八所載)天文廿二年三月の條に、「高円の側なる羽易の山の下に客養寺とて志深き人住みけり。」とあり。「客養寺カクヤは能登川に沿ひたる地なれば、羽易の山は今の白毫寺の上方なるヲドリ山なるべし」と森口奈良吉氏はいへり。白毫寺の附近は古来墓地なりしものと見ゆ。

二一〇 うつせみと云々大鳥の羽易山に云々

一八二七 春日なる羽買の山ゆ猿帆の内へ鳴きゆくは孰喚子鳥

「吉野詣記」を著した称名院右府公條とは、三条西公條^{きんえだ}を指す。三条西実隆の次男で父より源氏物語の講釈を受ける。三条西実隆は、万葉集欠本の補写、足利義尚の「万葉作者部類」への参画、万葉部類書「一葉抄」の作成、仙覚の「万葉集註釈」の書写・万葉校合などといった様々な側面から、万葉集研究に関わっていたことが知られているが（大久保正「三條西実隆の万葉研究」『万葉』10、S29・1）、その父を天文6（1537）年に失って以降公條は、名実ともに歌人・古典学者の大家となった。

また、文中にある「客養寺」は、「隔夜寺」のことと推定され、『奈良県の地名』（平凡社、S56）には、

㊦奈良市高畑町

新薬師寺北方に所在。華嚴宗。本尊十一面観音は長谷観音一〇分の一の模像。当時勧進帳（「奈良坊目拙解」所収）に「客養寺隔夜堂者寛文年中南都刺史中坊美作守時祐 建立也」とあり、「奈良坊目拙解」には「当寺ハ興福寺勤修坊支配也、長谷寺隔夜修行者三四侶在住而守之、毎日二法師詣于泊瀬寺、亦両僧自長谷皈宿ヌ此堂ニ、故名隔夜堂矣」と記している。現桜井市の長谷寺との間を隔夜に往復する勤行は大正（一九一二—二六）頃まで継続されたが、現在は廃されている。堂内には本尊とともに空也像一体を安置する。

とある。豊田は、確かに「職を奈良に奉ずるが故に実地研究には非常に便利なる地位に在」ったけれども、やはり古蹟に通暁する森口の助言に導かれることも多くあったと思われる。『地理考』刊行後、羽易の山の所在を云々する際に、さかんに「吉野詣記」は引用される。しかし、春日社の資料を整理する任にあたってたという森口の着眼なくしては、発掘されることの難しい記事であったと思われる。豊田は、その森口の見解を『万葉地理考』に正確に残した。そしてそれは、あの犬養孝の名著『万葉の旅』の「全地名の解説」にまで継承されることとなったのである。奈良女子高等師範学校で、一時期同僚として過ごした二人の交流。それによって生まれた見解が、現在まで一つの成果として継承されていることは特筆すべきことであると思われる。

尚、『地理考』刊行の翌年には、大井重二郎の『万葉集大和歌枕考』（曼陀羅社）が、さらに北島葎江『万葉集大和地誌』（昭和16年、関西急行鉄道）や、阪口保『万葉集大和地理辞典』（昭和19年、創元社）が相次いで刊行されたが、いずれも「大和」の地に限定していることを考えると、畿内はもとより石見や九州にいたるまでの地名を網羅している豊田の『万葉地理考』の価値は極めて高いものであったと言えるであろう。

三、まとめ

万葉集の歌に注釈を施すための努力は、遠く中世の仙覚以来重ねられてきたものである。歌に詠み込まれた土地が現在のどこにあたるのか、豊田八十代は、文献の調査と同様に実地踏査、親しくその地を訪れることを重視した。そもそも豊田が万葉集の研究に着手したのは、奈良女子高等師範学校に赴任し、日々、身近に万葉の風土に触れたことが契機であったし、森口奈良吉ら、志を同じくする人々との出会いも、この奈良という地であった。

豊田の業績として、現在『万葉植物考』及び『万葉地理考』を取り上げることが多い。特に『地理考』は、昭和39年に社会思想社から出版された犬養孝氏の名著『万葉の旅』の「万葉全地名」に引用された。豊田の著作は、万葉集の時代をしのぶよすがであるばかりか、後人たちによる研究の端緒を開くという側面も有する。今なお、万葉地理研究史の中に位置づけられるべき成果であると思う。